『万葉集』「玉敷く」の表現性

小田芳寿

一　はじめに

1　あらかじめ君来まさむと知らませば門にやどにも玉敷かましを　（巻六・一〇一三）

2　玉敷きて待たましよりはたけそかに来たる今夜し楽しく思ほゆ　（巻六・一〇一五）

3　思ふ人来むと知りせば八重むぐら覆へる庭に玉敷かましを　（巻十一・二八二四）

4　玉敷ける家も何せむ八重むぐら覆へる小屋も妹と居りてば　（巻十一・二八二五）

5　玉敷ける清き渚を潮満てば飽かず我行く帰るさに見む　（巻十五・三七〇六）

6　堀江には玉敷かましを大君をみ船漕がむとかねて知りせば　（巻十八・四〇五六）

7　玉敷かず君が悔いて言ふ堀江には玉敷き満てて継ぎて通はむ〈或は云ふ、「玉扱き敷きて」〉　（巻十八・四〇五七）

8　むぐら延ふ賤しきやども大君のまさむと知らば玉敷かましを　（巻十九・四二七〇）

9　松陰の清き浜辺に玉敷かば君来まさむか清き浜辺に　（巻十九・四二七一）

『万葉集』中、「玉敷く」表現は、異伝注記あわせて九首十一例あり、類歌・類想歌が多い。

この「玉敷く」表現は、「珠敷カマシヲハ、マラウトヲ敬マヒテ云ナリ」（『万葉代匠記』精撰本、一〇一三）とあるように、来客を迎える表現であることがわかる。

ところで、「玉敷く」という表現の意味内容は先のようなものであるが、万葉びとは、その表現を歌に詠み込む際に、歌の詠み手や聞き手達は、どのような世界を思い描いていたのだろうか。また、そのような世界を踏まえつつ、歌のなかでそれがどのようにはたらいていたのだろうか。

本稿では、「玉敷く」表現の歌のなかでのはたらきを考えるこ

とを通して、「玉敷く」と表現されるものの実態と「玉敷く」表現との差異を明確にしてみたい。[1]

二、「やど」と「玉敷く」

まずは、8歌、天平勝宝四年（七五二年）仲冬十一月八日に、聖武天皇が左大臣橘朝臣諸兄の邸宅を訪れ、その際に肆宴が催された折に、橘諸兄が聖武天皇に対して詠んだ、「むぐら延ふ賤しきやど」に「玉敷かましを」という表現から考える。

「むぐら延ふ賤しきやど」とは「今日の挨拶に普通に用ゐる『むさくるしい』」（『万葉集注釈』）意であり、自邸を卑下する表現である。『万葉集』中、自邸を卑下する表現として、右の3、4歌の「八重むぐら覆へる庭、小屋」、そして、「むぐらふの汚きやど」（巻四・七五九　大伴田村大嬢）がある。しかし、これらの表現は、親密な間柄で詠まれ、「戯歌」的要素を含んだもの[2]であって、8歌「むぐら延ふ賤しきやど」は、上皇と臣下という関係の中で詠まれたものであるから、上皇の来臨と歌を賜ったことに対して、自身の立場を卑下し、無上の光栄の意をあらわした表現として見るべきある。

では、上皇と臣下という関係の中で詠まれる「むぐら延ふ賤しきやど」に「玉敷く」という表現はどのように考えるべきか。都倉義孝氏[3]は、「玉敷く」表現が「敷かれた玉を踏む相手を至高の存在とする表現」と指摘する。敷いている「玉」を踏む、聖武上皇を最高の存在として讃えるわけであるが、諸兄をはじめ、上皇やその宴席に参列していた人々は、上皇が「玉」を踏む世界を、どのような世界として思い描いていたのであろうか。

この疑問を考える上で、後代のものではあるが、次の『和歌童蒙抄』の記述に注目をしたい。

庭

思ふ人来むと知りせば八重むぐら覆へる庭に玉敷かましを

萬十一に有。玉敷庭とは本文に玉墀といへり。玉とはうるはしくよしといふ詞也。

（『和歌童蒙抄』[4]第五、居處部、庭）

右の『和歌童蒙抄』の記述は「庭」について、3歌をとりあげ、注を施したものである。まず、右の傍線部に着目すれば、「本文」とは何か明らかではないが、「玉敷庭」を「玉墀」とする。さらに、波線部には、「玉」を「うるはしくよ」きものとしている。「玉墀」という表現は『文選』において、

八神警レ引、五輅遷レ跡。嗷嗷儲嗣、哀哀列辟。灑二雫玉墀一、雨二泗丹掖一。

（『文選』第五十八巻　劉宋・顔延之「宋文皇帝元皇后哀策文」）

とある。右の一節は、宋の文皇帝の元皇后が崩じたことによって、その哀しみを生前の功徳を讃えながら詠んだものである。この一節に見える「玉墀」について五臣注の呂向注は、「向曰、灑雫雨泗皆涙落也玉墀丹掖、皆宮殿之間也、而以玉丹飾也」（『文選』第五十八巻　劉宋・顔延之「宋文皇帝元皇后哀策文」）として、「宮殿の間」とする。つまり、「玉墀」は、宮殿をあらわす表現であった。[5] ただし、元皇后が崩じたことによる、哀しみを宮殿の美麗な景・情併せ表現するところからも、単に宮殿をいうものではなく、詠まれる心情と宮殿の美しさとを併せたものといえよう。このように見ることができる例は他にもある。例えば、

臨玉墀之皎皎、含霜靄之濛濛、轎天衢而徙度、轢長漢而飛空、隱巖崖而半出、隔帷幌而纔通、散朱庭之奕奕、入青琄而玲瓏、聞階悲寡鵠、沙洲怨別鴻、文姫泣胡殿、明君思漢宮

（『玉台新詠』第五巻　陳・沈約「雑詩四首」八詠二首）

銀燭朝天紫陌長禁城春色曉蒼蒼千條弱柳垂青瑣百囀流鶯遶建章劍佩聲隨玉墀歩衣冠身惹御爐香

（『唐詩選』盛唐・賈至「早朝大明宮呈兩省僚友」）

とある前者では、「玉墀」は宮殿をあらわすが、台に登って秋月を望みながら、連想のさまを、宮殿の景・情併せ叙するものであるから「玉墀」は宮殿の様相の美しさをいうのである。また後者は、盛唐のものではあるが、朝廷の政が早朝に行われるにあたって、宮殿に参内した官人達が、宮殿の間を歩く様の美しさを表現したものである。

一方、『玉台新詠』には、

璿閨玉墀上椒閣、文窗繡戸垂綺幕

（『玉台新詠』鮑照「雑詩八首」行路難四首）

のように、宮殿の景・情を詠むものではなく、傍線部の表現から、宮殿の間に準ずる様相の美麗さを詠むものがある。

このように「玉墀」には、宮殿の美しさを景・情併せ表現したものと、宮殿に準ずる美しい世界を景・情併せ表現するものがある。

前掲、『和歌童蒙抄』が万葉歌における「玉敷く庭」を「玉墀」としたのも、漢籍における「玉墀」の表現を理解したうえで、『玉台新詠』鮑照「雑詩八首」にみえる、宮殿に準ずる建造物の美しい世界と、「うるはしくよし」とした「玉」を敷いて飾ることによって、美麗な様相をあらわすこととを重ねあわせたからではないか。

もちろん、『和歌童蒙抄』の考え方には平安時代以降における万葉享受の問題を考えなければならない。

しかし、例えば8歌は、肆宴の場に上皇を迎えるにあたり、

「やど」に「玉」を飾ることによって、上皇にふさわしい、美しい世界を創出し、讃えるわけであるから、「玉」を飾っている宮殿の間の美しい様相をあらわす、「玉墀」の表現性と通じるのではなかろうか。「やど」に「玉敷かましを」と反実仮想の表現を詠むのも、臣下の邸宅にはありえない宮殿のような世界を創出したかったためであろう。

そもそも、『万葉集』には、皇族にふさわしい世界として宮殿の様相を詠む歌がある。例えば、

・・・我が思ふ皇子の尊は春されば殖槻の上の遠つ人松の下道ゆ登らして国見遊ばし九月のしぐれの秋は大殿のみぎりしみみに露負ひてなびける萩を玉だすきかけて偲はし・・・

（巻十三・三三三四　挽歌）

のように、みぎりが敷き詰められている宮殿の様相を、皇子という人物にふさわしい世界として詠んでいるものがある。8歌とは、尊い人物にふさわしい世界として、臣下の邸宅にはありえない宮殿世界を創出し詠むところに共通性を見出せよう。

以上のことを踏まえれば、8歌は聖武上皇の来臨と歌を賜ったことをこの上ない、光栄なこととし、自身の立場を卑下したうえで、上皇にふさわしい「玉」を飾った宮殿のような美しい世界を肆宴の場に創出する表現を詠んだところにこそ、上皇に対する諸兄の奉仕の言挙げを成したと詠むことができる。

なお、1、2歌における「門」、「やど」に「玉敷く」表現は、門部王宅に橘佐為らが集った時の歌であり、親しい間柄の中で詠まれた表現である。[6] 8歌においても橘諸兄と聖武上皇は親しい間柄にあったと考えられるが、上皇に対する表現と臣下の間で交わされる表現とを同一視するわけにはいかない。

では、1、2歌における「玉敷く」表現はどのように考えるべきか。1歌の作者、門部王と橘佐為は同位階であったから、二人の間や宴席に座している人々との間に敬意は必要なかったであろう。そのように考えた時、自らの邸宅を「玉敷く」ような美麗な空間として表現することは、軽妙ささえ帯びて、笑いを誘うものであったろう。

また、3、4歌における「庭」、「家」に「玉敷く」表現は、「思ふ人」と「妹」のやり取りの中で用いられている。さらにこの3、4歌は、「戯歌」的要素を含んだ「八重むぐら」という表現を踏まえての恋歌である。そうなれば、3、4歌における「庭」、「家」に「玉敷く」表現も「戯歌」として要素を持つことになるであろう。つまり、「玉敷く」ような美麗な空間を「戯歌」的に表現したものとして考えられよう。そのように考えた時、3、4歌における「玉敷く」表現は1、2歌における「玉敷く」表現と同じく、饗宴の場において、笑いを誘うはたらきを持つ表現であったと考える。

も　（巻二・一八一　草壁皇子の舎人等の歌）

水伝ふ磯の浦回の石つつじもく咲く道をまたも見むかも

（巻二・一八五　草壁皇子の舎人等の歌）

のように、舎人たちが草壁皇子の薨去による悲しみ、傷みを島の宮の景・情併せて詠んだものである。島の宮は、庭園の中に池を造り、そこに「島」を築いたものであった。岸俊男氏[7]は、「島」を築く造園法の起源を知るうえで、朝鮮半島の慶州にある雁鴨池遺跡に着目し、「池中に嶋を置き、池辺の建物を臨海殿・望海楼と号している。日本の古代庭園が『嶋』という言葉でよばれる以上、本来やはりそれは『嶋』のある海辺を模したもの」であることを指摘する。岸氏が指摘する雁鴨池遺跡は、比較の対照としてしか扱えないが、それでも庭園が海を模倣して造られていたことは注目すべきである。

右の歌々における「荒磯」、「磯の浦回」においても、

石そそき岸の浦回に寄する波辺に来寄らばか言の繁けむ

（巻七・一三八八　作者未詳歌）

荒磯越す波は恐しかすがに海の玉藻の憎くはあらずて

（巻七・一三九七　作者未詳歌）

にあるように、「浦回」、「荒磯」は海辺の岩礁を表現するものであるから、海辺の海岸を表現するものであろう。[8]「浜辺」も海の

三、「池」と「玉敷く」

さて、8歌が詠まれた肆宴の席では、もう一例、「玉敷く」という表現が見える。それが9歌、藤原八束作歌である。この9歌における、「松影の清き浜辺に玉敷かば」という表現の発想の起点は「是ハ左大臣ノ哥ノ落句ヲ承テヨマレタル歟。」（『万葉代匠記』精撰本）であろう。ただし、問題は、8歌は「やど」に「玉敷く」という表現であったのに対して、9歌は「松影の清き浜辺」という、いわば海辺（水辺）に「玉」を「敷く」表現に転換されていることである。そこで、次に9歌が8歌における表現を転換した理由を考えることを通して、「松影の清き浜辺」に「玉敷く」表現を詠む際に創出される世界について考察を試みる。

9歌における「松影の清き浜辺に玉敷かば」については、「庭の池のさま也。此宅をほむる詞也」（『万葉拾穂抄』）とある。9歌が諸兄の邸宅で詠まれたことを考えれば、この見解は首肯できよう。

そうであれば、庭の池の様を詠むために、八束はなぜ、「松影の清き浜辺に」として海辺に関する表現を歌に詠んだのであろうか。

そもそも、古代の庭園は海を模倣していた可能性が高い。例えば、次の歌々は、

み立たしの島の荒磯を今見れば生ひざりし草生ひにけるか

景観をいうものであるから、古代の庭園は「荒磯」や「浜辺」とも表現され、海に倣うものであったと言えよう。

では、海辺の景観をあらわす、池の様相を詠んだ「松影の清き浜辺」に、「玉敷かば」という表現はどのように考えるべきか。この疑問を考える上で着目をしたいのが、実際の海辺に「玉敷く」表現が詠まれている5歌「玉敷ける清き渚」である。「玉敷ける清き渚」とは、「浪の打よするみな玉しくといふ」（『万葉代匠記』初稿本）であるから、海から寄せられる「玉」が敷き詰められた渚の美しい景観を言うのであろう。そうであれば、海辺の景観をあらわす9歌「松影の清き浜辺に玉敷かば」という表現は、5歌「玉敷ける清き渚」という海辺の景観を相定し詠んだものとして考えられる。つまり、「松影の清き浜辺に玉敷かば」は、実際の海辺の景である「松影の清き浜辺」に海から寄せられた「玉」を敷き詰めた美しい景観を仮に用意できたならば、と仮定し、それを前提とした上で美しい「清き浜辺」に再度の来訪を願い詠むものとしてみることができる。

そのように考えれば、次に問題となるのは、八束はなぜ、「清き渚」ではなく「清き浜辺」と詠んだのか、ということである。『時代別国語大辞典　上代編』には、「渚」は「波打ち際。水際」であるのに対して「浜辺」は「はまのほとり」とあるから、八束が、「浜辺」という表現を詠んだ意義を考えねばならないだろう。例えば、「清き浜辺」は次の歌に着目すれば、

ますらをはみ狩に立たし娘子らは赤裳裾引く清き浜辺を
（巻六・一〇〇一　赤人　難波宮行幸従駕歌）

のように、天皇の行幸、或いは遊覧にふさわしい場でもあったことがわかる。

したがって、八束は9歌において「清き渚」ではなく、上皇の来臨にふさわしい「清き浜辺」という表現を用いたのであろう。

以上のことを踏まえれば、9歌は「松影の清き浜辺に玉敷かば」と、上皇にふさわしい、玉が敷き詰められている浜辺の景観を創出し、「君来まさむか清き浜辺に」と再度の来訪を願うところに、上皇に対する八束の奉仕の言挙げを成したと詠むことができる。

四、「難波堀江」と「玉敷く」

次に6、7歌における「難波堀江」に「玉敷く」という表現を考える。6、7歌は、左注にある「御船江を泝り遊宴する日に、左大臣の奏する、併せて御製なり」という表現から元正上皇が難波宮に行幸をされたときに難波堀江において舟遊びが行われた際に詠まれたものであろう。「難波堀江」とは仁徳期に造られた大土木工事の産物である。

そのような場で詠まれた「難波堀江」に「玉敷く」という表現については、堀江そのものに「玉」を敷き詰める意とするものと、「御道筋を美装する意」（『万葉集総釈』尾上八郎担当）とするも

のがある。[9] この『万葉集総釈』の見解は堀江の実態を考慮した上でのことであろうが、6歌は「堀江には玉敷かましを」であり且つ7歌は6歌に和したものであるから、「難波堀江」に「玉敷く」という表現は仮想の世界として考える必要があるだろう。

そうなれば、「難波堀江」に「玉敷く」という表現はどのように思い描かれていたのであろうか。

「難波堀江」は、海に面している天満砂州を開削したものであったから、堀江は砂州状もしくはラグーン状の場であり、浜辺や渚に近い環境であったことが考えられる。[10] そうであれば、「難波堀江」に「玉敷く」という表現は、5歌「玉敷ける清き渚」という海辺の景観に近似していよう。すなわち、「大君をみ船漕がむとかねて知りせば」と詠みながらも、海から寄せられる「玉」が堀江一面に敷き詰められた美しい景観を用意できなかったことを後悔する表現である。上皇を迎える際に、「難波堀江」という広大な運河に「玉」を敷き詰める表現は、上皇にふさわしいものであったと言えよう。

7歌においても、6歌に和したものであるから、「玉敷き満てて」は6歌と同様の景観であったであろう。

では、そうした場に上皇が「継ぎて通はむ」と詠むことは、どういうことを表現しようとしているであろうか。例えば、次の歌には、

落ち激つ 片貝川の 絶えぬごと 今見る人も 止まず通はむ

（巻十七・四〇〇五　池主　立山の賦に和ふる歌）

のように、朝夕仰ぎ見る自然の「立山」の景に対して思慕の情を抱き、讃美するが故に「止まず通はむ」と詠むものがある。自然の景観の美しさを讃え、且つ慕わしいものであるがために通うと詠むところは、7歌における「継ぎて通はむ」と通じていよう。[11] つまり上皇（7歌）は、諸兄（6歌）が、海から寄せられた「玉」を堀江という広大な運河一面に敷き詰めた美しい景観を用意することに対して、その景観を美しく慕わしいものとして讃えているのである。それは、まさに皇族においてもありえない景観であったろう。だからこそ、上皇は、自ら「継ぎて通はむ」と詠んだと考えられる。

以上のことを踏まえれば、6、7歌における「難波堀江」に「玉敷く」という表現は堀江という長大な運河に、海から寄せられた「玉」が敷き詰められている景観を創出する表現であり、上皇と臣下という関係の中での最上級の言寿ぎとして詠むことができる。

なお、7歌には「或云」として「玉扱き敷きて」という表現がある。[12]「扱く」という表現からも、上皇が装身具として緒に通してある「玉」をばらばらにしごき落して難波堀江に敷き詰めた景を詠んだものであろうが、「玉扱く」という表現をどのように思い描いていたのであろうか。例えば、

秋風の吹き扱き敷ける花の庭清き月夜に見れど飽かぬかも
（巻二十・四四五三　家持）

のように、庭に花が吹きしごかれた様を詠む歌がある。このように「玉扱く」という表現も、上皇が花をしごき落とすかのように、「玉」を扱き落とし、堀江一面に敷き詰める景を思い描いていたと考えられ、それは、7歌本文と同様に、上皇にふさわしい景であったであろう。

五、おわりに

6、7、8、9歌における「玉敷く」は1、2、3、4、5歌における「玉敷く」とは異なり、上皇臨席の肆宴の場において、言わば上皇と臣下という関係の中で詠まれた表現であったから、臣下同士で詠まれる場合と、上皇に対して詠まれる場合とでは、生まれる表現に差異があったと言えよう。6、7、8、9歌は、上皇にふさわしい壮麗な景観を創出するものであり、とりわけ、6、7歌においては、「難波堀江」という大土木工事の産物に美しい世界を創出するという、皇族においてもありえない景を詠み讃えるものであった。

したがって、これらの「玉敷く」という表現は、『万葉集』中における天皇、上皇讃歌の中でも最上級の言寿ぎ表現として位置付けることができたのではなかろうか。無論、『万葉集』中における上皇、天皇を含めた皇族に関する歌の考察を踏まえたうえで述べる必要があるが、それは今後の課題としたい。

以上、「玉敷く」という表現を歌に詠み込む際に歌の詠み手や聞き手は、どのような世界を思い描いていたのか、を考えることを目的として、「玉敷く」と表現されるものの実態と「玉敷く」表現との差異を明確化することを試みてきた次第である。

註

（1）「玉敷く」表現の研究史には、沢瀉久孝氏（『万葉集新釈』下巻、星野書店、昭和九年四月）の、3、4歌の問答歌が愛誦されているうちに機に応じて、1、2、8歌等の賓客を迎えた宿の主人の辞令として用いられるに至ったとするものや、山崎健司氏「萬葉集における類型的表現―巻二十、橘諸兄作の四四五四番歌をめぐって―」（『日本古典文学の諸相』勉誠社、平成九年一月）、青木生子氏（『万葉集全注』第十八巻、有斐閣、平成九年十一月）、井上さやか氏「橘諸兄の宴席歌―「玉敷く」の表現をめぐって―」（『中京国文学』第十七号、平成十年三月）、都倉義孝氏「橘諸兄の歌」（『セミナー万葉の歌人と作品』第十一巻、和泉書院刊、平成十七年五月）は、3、4歌の作者未詳歌と5歌、遣新羅使人歌群の一例を除いた六首もが、橘氏が関わる宴席での歌であることからも、「玉敷く」表現が、橘氏をめぐる人間関係を考慮し、橘氏を

中心とした文芸上の関係の中で生まれた表現とするものがある。

本稿では、こういった人物関係や『万葉集』の中で「玉敷く」表現を考えるのではなく、万葉の時代において、「玉敷く」表現がどのようなものであったのか、ということを明らかにすることを目的とする。

(2) 巻四・七五九について、鈴木日出男氏「相聞歌の展開」(『古代和歌史論』東京大学出版会、平成二年十月)は、七五九番歌を含む田村大嬢が異母姉妹の坂上大嬢に宛てた歌(巻四・七五六～九)を、恋歌表現を転用した親密な挨拶を交わしたものとし、その挨拶性を社交的・遊戯的とも指摘する。巻四・七五九の左注に「姉妹諮問ふに歌を以て贈答す」とあることを踏まえて考えれば、鈴木氏の指摘は首肯できる。

また、3、4歌の問答歌について、中川幸廣氏「万葉集巻十一・十二試論—その作者の階層の検討を通して—」(『語文』第二十二輯、昭和四十年十月、『万葉集の作品と基層』桜楓社、平成五年二月、所収)は、巻四・六六五～七の左注に「聊作戯歌以為問答也」とあることから、この二首を含めた、巻十一・十二の問答歌が「『戯歌』のカテゴリーに属せしめて良い歌が多いように思われる」とする。『万葉集』中の問答歌の在り方を明確にしたうえで3、4歌の問答歌を考察すべきであろうが、自身の邸宅を「むぐら延ふ賤しきやど・小屋」と表現して恋のやりとりを交わすところは、巻四・七五九に近い遊戯的、挨拶的要素をもったものと見ることができる。

(3) 都倉義孝氏「橘諸兄の歌」(『セミナー万葉の歌人と作品』、第十一巻、和泉書院刊、平成十七年五月)

(4) 引用は、『日本歌学大系　別巻一』風間書房、昭和三十四六月年に拠る。

(5) 「玉墀」における「玉」は『説文』(「玉」部)に「石之美有五徳者」とあることからも、「石」として、「墀」は、『後漢書』(班固傳上)に「玄墀釦切玉階彤庭硬椷采緻琳珉青熒珊瑚碧樹周阿而生」とあり、注に「墀殿上地也」と見えるから、「玉墀」は、宮殿に関する表現である。

(6) 3、4歌は門部王宅に橘佐為らが集い宴を行った時に詠まれたものである。宴席には親王や五位以上の官人などの犯罪を摘発する弾正台の長官であった門部王や、門部王と同位階の橘佐為がいた。また門部王は、「風流侍従」『家伝』(下)と称されていた人物でもあった。その他には橘佐為の息子の文成、志貴皇子の血を引く榎井王らが座していた。こうした人物関係から想定するに、宴に集う一座は、お互いに敬意が必要のない程の親しい間柄であったと考えられる。

(7) 岸俊男氏「万葉集と遺跡—嶋を事例に—」(『遺跡・遺物と古代史』吉川弘文館、昭和五十五年十二月)

（8）巻二・一八一における「荒磯」については、亀田博氏「飛鳥地域の苑池」（『橿原考古学研究所論集』第九巻、吉川弘文館、昭和六十三年十月）は後代の造園書である『作庭記』の記述に依りつつ、「『万葉集』歌の荒磯はやはり海辺の荒磯に似たものが作られていたと見られる」とする。また、亀田氏「飛鳥京跡苑池遺跡」（『明日香風』第七十二号、飛鳥保存財団、平成十一年十月）は、平成十一年に発掘された飛鳥苑池遺構において、苑池の西辺に護岸の石垣があり、その石垣は五七度の斜度で斜めに石が積まれていることからも、こういった石組を「荒磯」といったのではないか、とする。

上野誠氏「発掘された古代の苑池」（『万葉びとの生活空間―歌・庭園・くらし―』塙書房、平成十二年十一月）は、亀田氏の見解をふまえ、「苑池の岸は海辺をイメージして、造形された可能性もあるのではないか」とし、さらに『万葉集』における「荒磯」という表現にも「『イソ』は岩を指す言葉であるから、山や川にも『イソ』があるのである（巻三の三一四など）。だから、海であるとは限らない。ところが、『アリソ』となると、事情は異なる。『万葉集』の約四十例ほどの『アリソ』を見ていると、そのほとんどが、海辺の岩礁を指しているのである。ということは、やはり十八一番歌の『アリソ』も、海辺の『景』に見立てられているのではなかろうか」として、「島の荒磯」（巻二・一八一）、「磯の浦回」（巻二・一八五）は海辺の海岸の様子に見立てた趣向をしめす表現であることを推察する。

飛鳥苑池遺構には、池の北側には張り出しが曲線的に形作られていることに加え、歌における「荒磯」の表現性を考えてみても亀田、上野両氏の見解は正鵠な推論であろう。

（9）日下雅義氏「『記紀』『万葉集』に自然の景をよむ」（『古代景観の復原』中央公論社、平成三年五月）は、「難波堀江」に「玉敷く」表現を、「堀江のほとりは、低くて軟らかい砂や泥で覆われていたため、そこを通行したり上下船するのが困難であった。そこで玉（礫）を敷きつめてとおりやすくしたのであろう。川の渡し場や田舎道の凹地や水たまりには、いまでも礫が敷きつめられることが多い。」として、堀江の実態や船の用途を踏まえたうえで、堀江のほとりに石を敷き詰める意として捉えられている。

（10）古代における「難波堀江」の地形について日下雅義氏「『記紀』『万葉集』に自然の景をよむ」（『古代景観の復原』中央公論社、平成三年五月）は、飛砂とデルタの発達した場であり、ラグーンであったことを指摘している。

（11）「通はむ」は『万葉集』中、臣下の奉仕する様として詠まれるものや、恋人を対象に詠まれるものが多い。特に、

巻十七・四〇〇五は「官人である作者が国庁に通勤することも込められている」（『新編日本古典文学全集　万葉集④』小学館、平成八年八月）が、なぜ、「通はむ」と詠んだのか、を考えれば、朝夕仰ぎ見る自然の「立山」の景を讃美し、「止まず通はむ」と詠んだものと言えよう。自然の景観の美しさを讃え、且つ慕わしいものであるが故に、通うと詠んだと見ることができる。7歌においても、なぜ、上皇自らが「通はむ」という表現を詠んだのか、ということを考えることにこだわりたい。

また、7歌は「継ぎて通はむ」であり、「止まず通はむ」ではないという疑義があがるかもしれないが、例えば、

大君の　継ぎて見すらし　高円の　野辺見るごとに　音のみし泣かゆ

（巻二十・四五一〇　高円離宮処を思ひて作る歌　甘南備伊香真人）

のように、「継ぎて見」る理由は慕わしいものへの思慕の情を表現しているものもある。このことからも、「止まず通はむ」は「継ぎて通はむ」と非常に近い、類想表現と言えよう。

(12)「或云」の「玉扱き敷きて」という表現には、その表現が生じた理由について沢瀉久孝氏（『万葉集注釈』第十八巻、中央公論社、昭和四十二年七月）や伊藤博氏（『万葉集全注』第十八巻、有斐閣、平成四年十一月）によって議論がなされているが本稿では、なぜ「或云」の異伝が生じたのか、という問題には触れず、「難波堀江に玉扱き敷きて」という表現が誦詠される際にどのような世界を思い描いていたのか、を考えたい。

（おだ・よしひさ　本学大学院博士後期課程）